
隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第 131 号

-環境・農業・食べ物など情報の交流誌-

2004.04.01 (木) 発行 山崎農業研究所&編集同人

<キーワード>

環境・農業・健康・食べ物などの情報提供、高齢者と若者、農村と都市の
交流ミニコミ誌。山崎農業研究所&『電子耕』編集同人が編集・発行。

http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_index.htm

*****発行部数 1638 部*****

□ 目 次 □-----

<今週の提言>牛肉輸入の安全性について 安富六郎

<読者の声>田んぼのおばさんから：長谷川さんから：丹羽さんから

<日本たまご事情>鳥インフルエンザ シンポジウム 愛鶏園・齋藤富士雄

<山崎農業研究所情報>

◇所報『耕 99 号』より

……新井 裕著「子どもの田んぼづくり教室に思う」 田口 均

◇『21 世紀水危機—農からの発想』を読む (その 14) 田口 均

……真勢 徹著「モンスーンアジアの農業水利」

<元気な農業・元気なくらし・10>

「通過儀礼」は教育の不易 農文協・栗田庄一

<私の農的生活・9>病虫害や野鳥などによる被害への対策 石川秀勇

<丹羽敏明の戦争体験>31

今だから話そう—『タピオカ』にみる終戦秘話 (その 1)

<編集後記・同人の近況報告>3月18日～3月31日

<今週の提言>牛肉輸入の安全性について

昨年の 12 月にアメリカで B S E 感染牛が発見され、日本への牛肉輸入が禁止された。輸入再開をめぐるのは、「全頭検査」を行なうか否かが最大の争点になっている。

米農務省は「全頭検査」について、これを実施する正当な根拠がない、と発表している (朝日新聞、2 月 5 日)。さらに現在行なっている日本の全頭検査は「過剰であり、非科学的」と批判した (毎日新聞、3 月 21 日)。

BSEや鳥インフルエンザの原因は、いままでに考えられなかった物質、またはウイルスである。従来のような防御態勢では、いつどこで発生するか分からない。これは人間に仕掛けられた「不測の一大事」である。病気が突発的に発生した場合、被害は甚大だ。人の命にもかかわる。

アメリカの検査方法は、集団としての平均的な量を扱う統計处理的な発想に基づいている。しかしこの方法では、個々の特性を表わすことはできず、処理の隙間をすり抜けてくる危険な突発事故を防ぐことはできない。この危険にたいして、より高い安全性が得られるなら「全頭検査」は病原の侵入を未然に防ぐもっとも確実な方法であろう。

ところで、アメリカはいま、テロという目に見えない敵の撲滅に戦争の大義を見出そうとしている。このための先制攻撃は正義の戦いになるというのである。外国からの入国にはいままでになく、一人ひとりに厳密なチェックが行なわれている。「不測の一大事」であるテロを防ぐには、統計的処理では手ぬるい、全人(?)に過剰な検査が必要というわけである。

食べ物に「安心・安全」という要素が加わって評価される時代である。これは長い時間かけて徐々に作られる一種のブランドであろう。牛肉輸入には法的なことは別として、食の安全という心理的な問題も含んでいる。いくら科学的と言っても安心できないものは望ましくない。入ってくる人間のチェックは厳しく、出ていく農産物にはチェックは甘いという、大国のご都合主義に屈することなく、わが国はもっと自信を持って「全頭検査」の正当性を主張すべきだ。

安富六郎

山崎農業研究所会員、土地利用学

y.noken@taiyo-c.co.jp

<読者の声>

●03/19 冬眠中の田んぼのおばさんより：

原田さま

まったくあまりに長い冬眠生活で忘れ去られたのではと
気にはなりつつ配信される『電子耕』を愛読しておりました。
「舌耕のネタ」はいつもわかりやすく、
そして私もそう思う！というテーマで楽しみでしたが残念です。

パソコンは『普通の』主婦である私にとっても世界を変えてくれました。
この1年間は「八王子に学校図書館を育てる会」を設立し、
その活動に奔走する日々でしたが
パソコンがなければこれらの活動も短期間で広がるが無かったと思います。
おかげさまで周辺の多摩地域には遅れをとるものの
なんとか行政に対しても、保護者はじめボランティアに対しても
学校図書館の充実の必要性を訴えることができ
少しずつですが理解者も増えています。

ただ、その間に確実に老眼も進行しました。
これだけは功罪の罪ですね。
薬の説明書、家電品の仕様書、老眼鏡が手放せません。
パソコンはまちがいなく目を酷使します。
それでも、もはやパソコンのない生活もありえないように思えます。

原田さんも、日没閉門、明るい時間に太陽の明かりの元、
拡大鏡でのんびり読み物を楽しんでください。
畑仕事の季節もそろそろです。
昼は畑で夜はパソコンの生活を、私はもうひとがんばり。

忘れたころの「舌耕のネタ」を楽しみにしています。
くれぐれもお体を大切に。

P.S.

忘れたころの・・・『晴耕雨読』は継続可能でしょうか？

Michiyo Ohashi

田んぼのおばさん

<http://homepage3.nifty.com/half-farmer/>

◇原田 勉からのお返事：

- > 「大橋さん、パソコンはプラスもあればマイナスもあります。
> 今後もどうぞ『晴耕雨読』を続けてお願いします。3/19 原田 勉」

ありがとうございます。

私の父は今年 82 歳になりました。

頑固者で、とうとうパソコンにさわろうとしませんでした

が母に押し付けた PC は世代間の交流を進めてくれました。

いまでは母も同年代を含む大勢のメル友ができています。

本当に、プラスマイナスいろいろある中で楽しみたいものです。

お父様にくれぐれも宜しくお伝えください。

- > 是非ご寄稿いただきたく思います。

ありがとうございます。

がんばります。

大橋 道代

●03/22 長谷川直子さんから：

「桜隊原爆忌の会」の長谷川です。

「電子耕」に「舌耕のネタ」が消えてしまうとのこと寂しくなります。

でもご無理なさらず、お体大事にしてください。

120号の「老人党宣言」に賛同する一にはちょっとショックでしたが、

122号で「正道をいく」とあり、私の尊敬する原田さんに間違いはないと嬉しくなりました。

93歳の私の母が何年か前に「戦前の状況に良く似てきている」といいましたが、ますますそういう感じになってきています。こういうときいったい何が出来るのか、考えてしまいます。

また何かの機会に貴重なご意見お聞かせください。季節の変わり目ご自愛ください。ありがとうございました。

☆-長谷川直子-☆

「夢のかけら」

<http://www.h3.dion.ne.jp/~nanchan/>

「桜隊」

<http://www.h6.dion.ne.jp/~skr-tai/>

◇原田 勉からのお返事：

長谷川さん

はげましのメールありがとうございました。

今まで読み書きをなりわいにしてきただけに、

目が不自由になると、すべて消極的になります。

でも、中途失明の人に比べれば、まだ一人で歩けるのですから幸せです。

だんだん慣れてくるでしょう。

これからは『電子耕』で交流した皆様との楽しい思い出を糧として

元気を取り戻したいと思います。

2004年3月24日

●03/29 丹羽敏明さんから：

130号の配信有り難うございました。

原田さんが「舌耕のネタ」の筆を折ることにされた由、眼の御不自由とあっては止むを得ませんが、哀惜の念を禁じ得ません。小生も1カ月に一度眼科医に診てもらっています。失明を恐れるが故にです。現役時代からの生業の延長でどうしても眼を酷使する傾向があり、眼前が霞むような現象に至って慌ててケアをする状態を続けています。医者からは今のところ白内障も緑内障も兆候は見られないと言われていますが、パソコンも本読みも時間を減らさないと取り返しのつかないことになるよと脅かされています。という次第で眼のほうは騙し騙し使っていますが、大切にしたいと、原田さんのお言葉を身にしみて痛感しております。原田さん、ゆっくり十分養生なさって下さい。

『虜囚のうた』より

「破れ衣の補修の針のつたなきに遠きむかしの亡母が恋しき」

「朝に往き夕べに帰るドリアンの実る香りすきはらにしむ」

「破れたる上衣手に取り故郷の母を浮かべて針を運ぶも」

「星冴ゆる南の天に妹思い祭る七夕逢う日あらしめ」

「閉じ合わす臉に浮かぶ父母よ幸くいませと南にいのる」

「病む母の夢に覚めたる暁に友に気兼ねの寝返りをうつ」

「寝足らいし朝の床に目覚めつつ作業無き日嬉しさを思う」
「レーションのひと品ずつを見つめつつ殊更に偲ぶ故郷の児等を」
「誰も居ぬ幕舎に一人ぼつねんと昼餉とる病む我が身淋しき」
「勅なれば只ひたすらにかしこめど矛おさむとは口惜しかりける」
「もろもろの苦難の道を踏み越えて国興さんと固く誓わむ」
「蛙の音畑にききて過ぎし日のふるさと思う小雨ふる夜は」
「皇国を想う心は変わらねど傷つきやすし今のわが身は」
「ひねもすの作業終わりシタぐれを又よみ返す妻の便りを」
「いくとせか吾は居なくにわが妻は子を育てつつ田畑まもるも」
「採石機の粉畑浴びてはたらけるこの苦力に乳呑子の有り」
「ひたすらに祖国にかえることにのみ希望つなぎて生くる日々をば」
「吾を待つ父母あれば忍耐のただ二文字に齒くいしばりおり」
「今はなき忠霊塔の跡悲し異国に散りし友を偲びて」
「囚屋には憂き事多き常なるを端にも言えざる事ぞ苦しき」
「怒鳴られて蹴飛ばされても耐え忍ぶこと重なりて年を迎えり」
「自らの国のみ旗を掲ぐさえ許可得る国となりけるかも」
「現し身の働き盛りをみいくさに捧げて尚も島に残れり」
「元日を寝たらいて皆のしずけさよ言葉少なく芋粥を食す」
「初日さす異国の岡に二歳を迎うはらから何を思うぞ」

=====

今井さんからも励ましのメールをいただきました。

◇原田 勉からのお返事：

今井さん ありがとうございます。

お父上をお大事に養生専一にねがいます。

また、紙上でお会いしましょう。 3/19 原田 勉

=====

◇原田勉から：

原田勉が単独編集長だった第116号まで〈森 清の読後感〉を

掲載していただいた森さんからも 3/24 に暖かいお手紙をいただきました。

ありがとうございます。

その後の読後感など以下で公開されています。

森 清さんのホームページ

<http://homepage2.nifty.com/morikiyoshi/>

<日本たまご事情>鳥インフルエンザ シンポジウム

3/27、東京農工大学にて市民対象に「鳥インフルエンザ シンポジウム」が行なわれた。ここで開催される日本家禽学界、日本畜産学界のプログラムのひとつとして企画されたものである。大学でやっていることを少しでも市民の方々に理解してもらうのが主旨とのことであった。大学もサービス精神旺盛になったものだ。

<http://www.tuat.ac.jp/~jsas103/shinpo.htm>

演者は

東京農工大獣医学 本多英一教授

「鳥インフルエンザについて」

国際農林業研究センター 山崎正史氏

「ベトナムにおける発生概略と現地生活者としての雑感」

愛鶏園 齋藤富士雄

「鶏卵生産の現場から」

それぞれが約 30 分、鳥インフルエンザの問題を中心に話をし後で質疑応答があった。

先のお二人は専門的な分野の話をかみ砕いて誰にでもわかるように話された。さすがプロである。私は話だけでは間が持たないので、スライドを使用しなんとか役目を終えた。専門用語または業界用語を使えば簡単に説明できることでも、これを一般の人たちに理解してもらうことは意外と難しい。

話題が話題だけに予想以上に市民の参加があったので主催者は驚いていた。参加者の関心はまず「鳥インフルエンザと人間の安全」であり、「鶏の安全、農場の安全」ではなかった。私ども農場サイドにいる者は、どうしてもこの順序が逆になりがちだ、このシンポジウムであらためて思い知らされた。

齋藤 富士雄

(株) 愛鶏園

<http://www.ikn.co.jp/>

<山崎農業研究所情報>

◇所報『耕 99号』より

……新井 裕著「子どもの田んぼづくり教室に思う」

最近、田んぼの学校や、田植え・稲刈りなどの体験学習が流行っているが、著者の新井さんも、仲間たちとともに、都市住民を対象に米づくりの体験教室を10年以上続けている。そんな新井さんが「少しもステップアップしていないことに苛立ちを覚えている」というのだから聞き捨てならない。

「田植えと稲刈りの参加者は多いが、草刈りには来た試しがない」し、「田んぼの生き物探しも予想外に参加者が少ない」。最近では、田植えに来て、田んぼに入るのを気持ち悪がる子どもや、汚れることを極端に嫌うお母さんや子どももいるそうだ。

苛立ちを抑えつつ、新井さんはこう言う。「それぞれの興味に応じて、それぞれに田んぼづくりを楽しめばそれでよいのではないか?」。田植えを楽しみたい子は田植えをすればいいし、作業は嫌いでもカエルやイナゴ取りをするのが好きな子はそうすればいい、畦草に関心をもつのであれば田んぼに入らなくてもいい、と。

新井さんはさらにこう言う。「田んぼの多面的機能というのは、まさに杓子定規な収穫物第一主義からの脱却ではなかったか?」「放っておけば耕作放棄されてしまう田んぼが、たとえ遊びであっても田んぼとして耕作が続けられているのも事実である」。

こうした“発見”あるいは“気づき”は、苛立ちを感じながらも10年以上にわたって活動を続けてきたことの効用である、といったら叱られるだろうか。新井さんの米づくり体験教室は、今年(2004年)で13回目を迎える。

田口 均
山崎農業研究所会員、編集者
y.noken@taiyo-c.co.jp

新井裕さんが代表を務めるNPO法人むさしの里山研究会のHP
<http://denq.gr.jp/~satoyama/>

所報『耕』の申し込み先（定価 1,000 円）
160-0004 東京都新宿区四谷3-5 太陽コンサルタンツ内 小泉浩郎
電話 03-3357-5916 FAX 03-3357-3660
k.koizumi@tayo-co.jp

◇『21世紀水危機—農からの発想』を読む（その14）
……真勢 徹著「モンスーンアジアの農業水利」

米づくりの季節が今年も巡ってくる。田起こし、水張り、代かき、そして田植え。こうして、ほんのすこし前まで地表をあらわにしていた「田んぼ」が「水田」の名にふさわしい姿になる。年々繰り返されるこのような光景は、わたしたち日本人にとっては当たり前のものだが、世界的に見ればそうでないところももちろんある。

日本の水関係者、とりわけ農業分野における研究者によると、アジアにおける農業用水利用の合理性についての国際的理解はなかなか得られないという。その原因は、国際世論の場が、アジアと風土が異なる欧米の技術体系に影響されがちであることによる。

アジアの農業を特著づけるのは、「モンスーン気候に由来する降水量の季節的な偏り」と「狭小かつ複雑な地形」を背景とした営農形態である。

アジアの農業には、この季節的な水の偏りを人間の手によって矯正すること、すなわち、溜池や農業用水による灌漑でコントロールすることが必然的に伴う（“Must irrigation”）。しかし、欧米のようにもともと天水農業が可能な畑作地域では、灌漑は生産性を向上させるための副次的なもの（“Not must, but more agreeable irrigation”）なのである。

また、狭小かつ複雑な地形は、環太平洋の褶曲造山活動を遠因とするが、アジアの農民は、貯水機能と土壌流失防止機能をもつ「水田というテラス」を営々として築き、そして維持してきた。それは、こうした地形のなかで営農するうえでの合理的な選択であったといえるだろう。

さらに、水生作物（Aquatic Crop）としての稲作の優位性、すなわち、連作障害の防止や有害物質の除去、用水による養分補給などは、「水張り灌漑、地下浸透、下流での反復利用」などによって発揮する。反復利用の結果、灌漑効率も普通考えられるよりずっと高い。だが、このような点は、欧米型の畑作灌漑の視点からは理解されがたい。

増大する世界人口を賄うための食料生産と、そのための生産環境の持続的な維持管理が 21 世紀には求められている。そして、アジアにおいて人口・食料・環境という 3 つの大きな課題に対処するうえで、水田農業以上に合理的な営農形態はない。

21 世紀は水の時代であるとも言われる。そんな時代だからこそ、水利用に関する国際的な相互理解がこれまで以上に必要になる。そして、相互理解の前提になるのは、自らが暮らす国の農と水との関係についての的確な理解であるにちがいない。

田口 均
山崎農業研究所会員、編集者
y.noken@taiyo-c.co.jp

真勢 徹：1941 年生まれ。秋田県立大学短期大学部教授。国際水資源管理研究所（IWMI）理事等を歴任。著書『水がつくったアジア』（家の光協会）
“Irrigation Work in Asia”（Cratsman Press Ltd.）

『21 世紀水危機—農からの発想』の内容・構成はこちらから
<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/book/03wadai008.html>
本のご注文は山崎農業研究所へ
http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_index.htm

<元気な農業・元気なくらし・10> 「通過儀礼」は教育の不易

「食育」が、内閣府から農水・文科・厚労3省にまたがる国民運動になって来ました。議員立法の「食育基本法」が参議院先議で国会に上程され、夏までには施行されようとしています。

「食育基本法」の前文には、「食育を、知育、徳育、体育の基礎となる教育の基本となるべきものと位置付ける」と記載されています。「食」は一生涯続く生活の基本であり、食を自立した健康なものにする「人間力」を育てる基礎として、幼児・子ども時代の「食育」はきわめて大切な取組みです。もちろん、「食育」は子どもだけでなく、若者から高齢者までの「生涯学習」の重要なテーマでもあります。あれがいい、あれが怖い、の風評に右往左往しやすいのが「食」であるからです。

「食育」の重要な対象は子どもたちです。子どもの「食育」に、大人はどうかかわればいいのか。食について、自ら考え、実践していける能力を育むにはどうすればよいか。

農文協が主催事務局となって実施した「地域に根ざした食育コンクール2003」で最優秀賞（農林水産大臣賞）を受賞した香川県綾南町立滝宮小学校の実践「子どもがつくる弁当の日」は、深い示唆を与えてくれます。

「ことしから『弁当の日』というのを実施します」と、4月に校長先生に言われたら、「えー？」と声を上げる母親が多いでしょう。「どうして学校給食があるのに弁当をつくらないといけないのか」、そんな声のなかで、平成13年度から「弁当の日」が始まりました。

滝宮小の「弁当の日」には3つの原則があります。

1つめは、子どもたちが献立をつくって食材を買いに行き、自分で朝早く起きて調理をして、弁当箱に詰めて持って来ること。親たちは絶対に手伝わないこと。その日の給食はお休み。

2つめの原則は、対象は「家庭科」の授業のある5年生と6年生のみ（1〜4年生は給食あり）。

3つめの原則は、実施は10月の第3金曜日から。4月に宣言してから半年間の猶予があります。ただし、1回だけではありません。10月、11月、12月、1月、2月の年5回。

弁当づくりの基本的なことは「家庭科」で教えますが、あとは実際に自分で弁当をつくらなければ、お昼ごはんが食べられない。こういう状況に持っていくと、子どもたちが育つ。それが「生きる力」だと語ってくれたのが、弁当の日を発案した前校長の竹下和男先生。身につけないと1人前になれないという思いが子どもたちを育てる。親が手伝わないことで子どもが育つと。

3年目の今、低学年の子どもたちは、上級生の弁当づくりをどう見ているのか。「滝宮小の子どもたちは5年生になったら自分で弁当をつくれるようになっていなければいけないと思っています」。「弁当の日」は言わば「通過儀礼」。一人前になるために、自分から弁当づくりの知識と技をつかみにいくという姿勢で、低学年から母親の食事作りを手伝う。だとすれば、弁当づくりは5年生と6年生だけでいい。「通過儀礼」という方法は「教育における不易の部分（変わらない基本）」だと竹下先生は言います。

また、年5回やるというのも、教育の不易の部分だと。1回だと親がつくってしまって終わりという可能性がある。だけど年5回ではその都度親がつくっていたのでは、親も子どもも格好がつかない。弁当づくりを重ねるごとにレベルアップ。そういう機会を与えるためにも月1回年5回というのは有効な方法だと。

「地域に根ざした食育コンクール2003」の受賞例には、子どもたちが学校の給食を、素材としての米や野菜も含めて自分たちでつくる「給食をつくろう大作戦」（広島県福富町立久芳小学校）もあります。こうした実践を通過した子どもたちは、まちがいなく食べ物への感謝の心と「生きる力」を自らつかんで変身を遂げています。（受賞事例の詳細は、農文協発行の「食文化活動37号」で特集しています。1部400円）

（社）農山漁村文化協会 提携事業センター所長 栗田 庄一
〒107-8668 東京都港区赤坂7-6-1
TEL.03-3585-1144 FAX.03-3585-6466
kurita@mail.ruralnet.or.jp
<http://www.ruralnet.or.jp/>

<参考リンク紹介>

「地域に根ざした食育コンクール2003」紹介ページ
<http://www.ruralnet.or.jp/shokuiku/>

にある、「審査結果・受賞事例紹介」ページ

<http://www.ruralnet.or.jp/shokuiku/2003/jusho2003.html>

に、

「子どもがつくる弁当の日」

http://www.ruralnet.or.jp/shokuiku/2003/jusho2003_01.html

「給食をつくろう大作戦」

http://www.ruralnet.or.jp/shokuiku/2003/jusho2003_03.html

も含めて受賞全33実践の詳細が写真付きで紹介されていますので是非ご覧ください。

なお、昨年度の「地域に根ざした食生活推進コンクール 2002」

…審査結果詳細…も、

<http://www.ruralnet.or.jp/shoku2002/2002/jusho2002.html>

で読めます。合わせてご覧ください。

<私の農的生活・9>病虫害や野鳥などによる被害への対策

第1回の稿で、ブルーベリーの優れた特徴として、4つあげられていることを記しました。その1つが「病虫害にやられる度合いは比較的少なく、農薬を使わないでも栽培できる」ことですが、実際のところはどうなのか。

病虫害にやられる度合いの比較的少ないことは、その通りと言ってよいと思います。しかし、いろいろな種類の病虫害の発生例が述べられ、注意されています。

まず病害では、果実軟腐病、ボトリチス病（花腐れ）、モニリア病（葉腐れ・実腐れ）といったような種類が記されています。栽培面積を拡大して、専門的に近い園地経営をしている場合に問題になるのですが、自分のところではまだこれらの病害への警戒を意識するまでには至っていません。

害虫については、イラガ・コガネムシ・カメムシ・ケムシ・ミノムシ・ショウジョウバエなど、多種類の発生が言われています。このうち、自分のところで多く見られるのはイラガで、幼虫が葉を食害します。その体長は2.5cm位になり、背面に刺毛があります。毒虫で、触れると電気に触れたように痛みが走り、後で皮膚がとてほかゆくなります。このイラガの幼虫が葉裏にいて、それを知らずに果実の収穫などしていると触れて、やられてしまいます。そこで、

ゴム手袋をして捕殺して回るようにしています。幼虫は、晩秋の頃から繭（俗称をスズメノショウベンタゴという由）を造るようになり、それが株元などに付いているのが見られますので、これも潰すようにしています。

その他、害虫は発生したら努めて捕殺したらいいと言われていますが、ショウジョウバエのみは、それでは対処できないので、やっかいとされています。この害虫は、果実に針を刺して卵を生みつけ、出荷できなくしてしまうという被害を及ぼします。対策は、落果は拾い集めるとともに、過熟果を樹に摘み残さないで処理し、発生を抑えることとされています。

野鳥による被害は多く、この方の決め手は防鳥網を使うことだとされています。地表の虫などをついばんでいるのか、畑におりてきている野鳥を観察していると、カラス・スズメ・ムクドリ・ヒヨドリなどで、里地に普通の種類です。それから、モズが枝先に止まっているのも見かけます。

野鳥による被害は、未熟果はやられず、果実が熟してから、飲み込んだり（ヒヨドリ）、突っつかれたり（スズメ）され、やられると言います。周辺に見られる季節の他の果実はと言うと、初夏のビワやグミ、秋のカキなどですが、これらの果実の色は黄色や朱色です。これに対し、ブルーベリーの果実の色は藍色で、小粒であるという違いがあります。色が目立たず、味も知らないということか、被害はこれまでのところまだ観察されないものの、一度学習されると、やはり防鳥網で樹を上からかぶせるようにしないと、どうにも防げないようになってしまうのかどうか。できれば、そんなことにならないように、と念願しているのですが…

各種の被害対策ということで、もう一付け加えますと、台風や季節風（西風）に対する備えです。植えつけて間もないような株には、必ず支柱をすることとされています。

石川 秀勇

山崎農業研究所会員、千葉県野田市在住

y.noken@taiyo-c.co.jp

<丹羽敏明の戦争体験> 31

今だから話そう—『タピオカ』にみる終戦秘話（その1）

『タピオカ』はA5版。ページ数は決めていない。20ページから多い時は140ページというときもあった。主な内容は演芸中隊時代のエピソード、演友の思い出、総会旅行参加の思い出(参加家族の手記も)、故人を偲ぶ記事などであるが、私が特に力点を置いた企画がある。それは『終戦秘話』である。演芸中隊は陸海軍混成で終戦時の駐屯地もまちまちであるから、終戦までの経緯も一定ではないはず。その一人一人の異なった体験記を残しておくことは意味があると考え、原稿募集にあたり私はこう書いた。

『戦争を遠い昔のこととしてではなく、自分たちの父や兄が体験した身近な問題として考えてもらいたいと思う。それには私たちが息子や娘たちにもっと戦争のことや敗戦のことを語り、記録として残しておく必要がある。ところが、われわれの戦争体験はもっぱら戦友同志の思い出話に終わってしまいがちである。世に出る戦記物は筆のたつごく少数の人たちの所産でしかない。共通の部分もあるが、一人一人の経験には違った部分があるはずである。「今だから話そう」というあなたの秘話を思い出すままに書いて頂きたいと思う。』

いくつか集まった記事の中から抜粋・要約して紹介する。

『名倉健二（陸軍中尉・演芸中隊長、平成15年1月死去、享年82歳）＝日本の降伏は昭和20年8月15日であるが、昭南（シンガポール）の軍人及び在留邦人約3万が終戦を知ったのは翌16日の正午頃である。この日の午前11時頃、第七方面軍野戦自動車廠の将兵は、ブキテマ三叉路西方の丘陵地に展開して戦闘開始を待っていた。ジュロン湿地帯に上陸した英印軍機甲部隊を迎撃する想定のもとで、わが部隊が初めて試みる演習である。高台に立った総指揮官・津曲少佐が戦況の説明に入ろうとした時、一台の乗用車が疾走してくるや、副官の塩田中尉があたふたと小山を駆けのぼり、何事かを少佐に耳打ちする。副官の悲壮な面持ちと報告を聞く少佐が手にした作戦要図を固く握り締める姿は只事ではないことを物語っていた。「戦争は終わったよ、名倉」と私の傍らにいた同僚の松永少尉が吐き捨てるようにつぶやく。「そんな馬鹿なことが?」複雑な気持の中で反発を試みる私だが、なぜか声にならずただ茫然と立ち尽くすのみであった。松永の予想は的中した。すでに昨日聖断は下っていたのだ。正午過ぎ緊急集合を命ぜられた将校連は、初めて部隊長から戦争終結を知らされたのである。終戦処理から検問、チャンギー刑務所を経てリババレー捕虜収容所に至る苦闘の途はいずれ「私のマレー戦記」にゆずるとして、わが小隊部品製造工場を去るまでの事件を列記する。◇マレーゲリラ戦を企図

した責任をとって竹林寺少佐はブキテマ高地にてピストル自殺。◇部下の亀谷伍長自殺未遂。9月に入り不穏な市街を単身臨時陸軍病院に赴き彼と決別。◇現地の協力工場商社へのツケを銀の延べ板やダイヤモンドで弁済。これが疑惑を呼びチャンギー投獄まで一下士官につけ廻される。◇華僑の略奪防止のため実弾数発発砲。工場裏手のトタン塀を剥奪される。◇9月5日午前10時、英艦隊を発見、マスト高くユニオンジャックの翻るを望見する。同日午後1時、英印第14軍団（インパール作戦軍）の一部、クリフォード埠頭に上陸、指呼の間に精悍なグルカ兵を見る。◇翌6日、ブキテマ本部と製造中隊（服部隊）に架電するも不通。意を決して英軍への施設引き渡しの任務を放棄しトラックにてマレーに遁走。』

『氏家孝夫（陸軍兵長、平成7年9月死去、享年82歳）＝思い起こせば昭和20年8月15日、私はスマトラ・バンガラランブランダンの第7航空情報連隊本部電報班の暗号手として、ひっきりなしに入ってくる電報の解読に懸命の努力を払っていた。確か終戦の1、2日あとであったと思うが、私は次のような緊急電報を受信解読し、茫然自失したことを覚えている。電文の内容はおおむね次のようであった。「8月15日政府において重大発表ありたるも南方総軍は依然現在任務を続行すべし」と。すでにこれ以前に役得で沖縄全滅の模様やガダルカナルの悲報などを傍受して承知していたので、ついに来るものが来たのかと判断はしたが、しかし不敗の神国日本がむぎむぎと敗れることは、と一縷の望みを抱いて小生たちは戦友と手を取り合って悲憤の涙にくれたものである。それから第2報「銃の菊の御紋章を削れ」とか、「重要書類を焼却せよ」とか次々に悲しい悔しい電報ばかりが入って来た。そして何日か後に「閑院宮春仁親王を勅使として派遣する」という電報が入った。これは停戦降伏を拒否した寺内南方軍総司令官説得のための使者であった。』

『芦沢伴三（憲兵兵長、山梨県在住、80歳）＝20年8月、当時私は昭南水上憲兵隊に勤務していました。4月、5月頃より種々なデマや情報がありましたが、「そんなことがあるものか」と思う反面、ある程度は本当だと感じてはいました。14日の夜に至って突然隊本部に集合を命ぜられ、オーチャードロードの本部に駆けつけました。すでに集まった隊員一人一人が固く口を閉じ腕を組んで天を見つめている者、気抜けしたような顔でうす笑いさえ浮かべている者、とにかく異様な雰囲気でした。隊長の訓示の要旨は次のようでした。「日本軍は天皇の命により連合軍に降伏する。南方軍にはまだ十分な戦力はある。残念だ。しかし軍人である以上は天皇の命に従わざるを得ない。」しばらく言葉が途絶えました。「連合軍の接收命令が出るまでは市内の治安維持はわ

れわれ憲兵の責任だ。市民とのトラブルを避け、特に武器使用には細心の注意を払うよう、決して短気を起こさぬよう、故郷の親子のことを考えて行動せよ。」隊の中でもひどいデマが飛び交いました。「全員英本国へ連行される」「いやビルマで鉄道の修復作業に生きている限りこき使われるらしい」等々とかく不安の毎日でした。やがて連合軍が上陸してきました。それ以来英軍MPと一緒に市内の要所要所を片言まじりのマレー語と英語で案内するのが日課でした。9月14日武装解除、真夜中にジョホールバルへ渡り、引き続いてクルアン・ブラックキャンプまで。2日後にアメーバ赤痢発病、入院しました。やがてその病院も病棟の半分は英軍に接收され合同病院となりましたが、伝染病棟には英軍も入ってこず、やれやれと安心していたところ、元使用人のボーイのため身元も割れ、首実検の上MPのジープでチャンギー刑務所へ。2カ月後再度発病、また病院へ。ようやく病も癒えて憲兵隊員14名、通訳2名はいつでも英軍の必要時に出頭できるよう同じ作業隊へ入れとのお達しを受けてリババレー作業隊に入隊しました。』

『斎藤一男（陸軍伍長、群馬県在住、82歳）＝終戦の年はシンガポール第三航空通信司令部の庶務係で、戦前のサラリーマンが日曜日の外出を楽しみに勤務しているようなのんびりしたムードでした。公用証も自動車部の連中は持って行ったまま返さず、週番士官にえらく叱られました。シンガポールで手に入る雑誌や映画の踊りの写真をスクラップしたり、警報が鳴ると倉庫に雲隠れして押収したラジオで敵国の情報をキャッチしていたところ、突然終戦。司令部の前をチャンギー刑務所から出て来た敵国兵が日本のトラックに乗って歓声をあげて通り抜けて行きました。マレー半島の一部に暴動が起き、銃を持たされたときは全身のふるえが止まらず、これが武者ぶるいかと解釈していました。移動でシンガポールからジョホールバルへ行く途中、黒い煙がいくつも昇っているのを見て、戦争映画のワンカットを見ているようでした。』

『梶原勝（陸軍伍長、福岡県在住、82歳）＝マライ半島クリームに向かう途中、列車内でソ連が日ソ不可侵条約を一方向的に破棄し、越境のニュースを聴く。ビルマでの敗退、ソ連の越境、追い詰められた気がする。クリーム着の日時ははっきりした記憶なし。8月17日か18日頃と思う。暗号班の同年兵より日本が負けたかも知れないと聞かされる。そんな馬鹿な、日本が負けるものか、明日は団体長会議、なんとなく割り切れない気がする。これで戦争が終わったのか、もう歩かなくてよいのか、不安と安堵が脳裏をかすめる。何時の日祖国日本へ帰れるのか。昭和19年4月、中国北支山西省出発、中国縦断、仏印、タイ、マライ、随分遠くへ来たものだ。編成時、陛下より頂いた光輝あ

る軍旗は兵士の動揺を恐れてか一部幹部で密かに奉焼。武装解除はスンゲータニー飛行場（マライ）で受ける。レンガムで所持品検査、身の回り品以外は処分するよう幹部から言われる。中国より描いてきたスケッチが気になりになる。処分する気にならない。検問前日、昭和20年11月28日、緊張と不安が交錯する。29日クルワン検問所へ。周囲は有刺鉄線を張り巡らせ望楼上では銃を持った兵が監視、敗戦の惨めさを痛切に感じる。スケッチを置きその上に無造作に品物を並べる。検査官が上からDDTを散布、終了。早くここを出たい。途中部隊が呼び止められる。一瞬緊張、間違いと分かり皆ホッとする。ここからシンガポールへ出発。シンガポール駅頭で一部はレンバン島（無人島）へ、我々はリババレー作業隊へ。12月2日、所長英軍将校ブライス大尉、作業隊長北嶋正治少佐、内地帰還までの1年8カ月の強制労働が待っていた。（梶原さんは昭和58年に従軍スケッチブック「遙かなる道程」を出版された。梶原さんが所属した第37師団は北支から中国を縦断し、仏印、タイ、マライに至るまでの敵陣を強行突破した勇猛果敢な部隊であった。同じ部隊の山砲連隊に、先日亡くなられた鹿児島県の衆議院議員・山中貞則氏がおられ、梶原さんの本の序文を書いておられる。私（丹羽）が終戦時に駐屯していたマレー半島スンゲパタニに第37師団が到着したときの全兵士の衣服はボロボロで惨憺たる姿だったことを覚えている。ここで第37師団も武装解除され、われわれより早く南下、部隊の一部の兵員がシンガポールのリババレー作業隊に収容された。）』

『平澤克彦（海軍中尉、リババレー作業隊本部副官、昭和59年6月死去、享年61歳）＝マレー半島最南端のジョホール飛行場で、三八一海軍航空隊の整備士官として勤務していました。僅かに数機残っていたゼロ戦はオンボロばかり、速成教育のパイロットは伎倆未熟でつまらぬ事故ばかり起こし、希望を失った暗い毎日を送っていました。8月15日は丁度宿直将校として隊の玄関番の役目についており、極秘電報の取り次ぎをしていたので、正午近くに日本から何か重要な放送があることは知っていました。定時にこっそり気象班の部屋へ飛び込み、宮澤気象士とレシーバーを二つに分けて一つずつ耳にあて終戦の詔勅の放送を聞きました。雑音まじりでほとんどよく聞き取れなかったけれども、どうやら戦争は終わったらしいということは判り、子供がこっそり内緒事を聞いてしまった時と同じような、他人に話しては悪いような、話したいような気持ながら、何となくホッとした気分がこみ上げてきたことを覚えています。本当はそれからリババレーの苦難がはじまることになったのですが。』

<編集後記・同人の近況報告> (3月18日～3月31日)

原田 勉より：

読者のみなさんへ。

卓上のパソコンを外して、見ないように、さわらないようにして2週間たちました。

眼を使わないよう、新聞も見出しだけ、本は読まず、テレビも30分以上は見ないことにしています。

できるだけ気をそらすように花見などに出かけますが、「〇〇なくて 何の己れが 桜かな」、肝炎で酒も飲めないのも、まぎらわすこと困難。今まで電子耕で交流した皆様の恩情を思い出してなぐさめています。

考えてみますと、「電子耕」の交流で、一番得をしたのは私だったと思いがたりました。ありがとうございました。

現状にだんだん慣れて、時間が解決するでしょう。

「なやみはつきないなあ 生きているんだもの」

相田みつをの言葉どおりですね。

tom@nazuna.com

<http://nazuna.com/tom/>

◎お願い「<読者の声>の投稿規定・メールの書き方」

1、件名（見出し）を必ず書いて下さい。「はじめまして」は省略して、言いたいことを具体的に。

2、氏名・ハンドルネームは、文末ではなく始めのほうに。

3、1回1テーマ、10行位に。

4、ホームページを持っている人は、文末に URL を。

5、JIS X0208 規格外の文字（機種依存文字）のチェックを。

<http://www.chem.sci.osaka-u.ac.jp/networks/check/jisx0208.html>

インターネットで使えない丸数字や半角カタカナ、括弧入り略号などは文字化けの原因です。

◎投稿アドレス変更のお知らせ

電子耕への投稿アドレスは、発行人の変更に伴い、

y.noken@taiyo-c.co.jp

となっております。投稿される方はこちらのアドレスをお願いします。

次回 132号の締め切りは4月12日、発行は4月15日の予定です。

最後まで読んで頂き有り難うございました。今後もよろしくお願い致します。

★『メールマガジンの楽しみ方』発売中

書名：岩波アクティブ新書 45 『メールマガジンの楽しみ方』

著者：原田 勉 定価：735円 発行日：2002年10月4日

発行所：岩波書店 ISBN4-00-700045-X

まえがき・目次・著者紹介・注文方法はこちら

<http://nazuna.com/tom/book.html>

『電子耕』から大切なお知らせ

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag.html

<本誌記事の無断転載を禁じます>

隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第131号

バックナンバー・購読申し込み／解除案内

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag2.html

2004.04.01（木）発行 山崎農業研究所&編集同人

<mailto:y.noken@taiyo-c.co.jp>

***** ここまで『電子耕』 *****